

多賀城跡 第94次調査

宮城県多賀城跡調査研究所

調査要項

所在地：多賀城市市川字大畑地内

調査指導：多賀城跡調査研究委員会
(委員長 佐藤 信)

調査主体：宮城県教育委員会
(教育長 伊東昭代)

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所
(所長 高橋栄一)

調査協力：多賀城市教育委員会

調査員：高橋栄一・白崎恵介・
村上裕次・初鹿野博之・
高橋 透・鈴木貴生

調査期間：令和2年5月21日～
令和2年11月13日

調査面積：約600m²



写真1 多賀城跡と調査区の位置(南西から)

1 はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では昭和44年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を計画的に実施し、遺跡の実態解明に向けた研究を進めている。令和2年度は、多賀城市が多賀城創建1300年記念の一環として多目的広場の整備を予定している多賀城政庁北側の政庁地区北方を対象に、第94次調査を実施した(写真1・2、第1図)。

政庁地区北方の調査は、これまで政庁の北側隣接地を中心に4度にわたって行われている(第2図)。その結果、政庁第Ⅲ期(780～869年)以降に掘立柱建物や竪穴建物などの遺構が確認されるようになること、政庁第Ⅳ期(869年～11世紀前半)には、政庁と一体的に機能した大型の掘立柱建物群「政庁北方建物」が認められることなど、政庁地区北方は政庁と密接な関係を持つ地区であることが判明している。そこで、今回の調査は、これまでに調査が行われた地点よりもさらに北側の範囲を対象に、遺構の分布や構成等の把握を目的として実施した。

2 調査成果

調査地点はA区とB区の2ヶ所で、政庁正殿から北に約80～120mの位置にある(写真2、第2図)。

(1) A区の調査

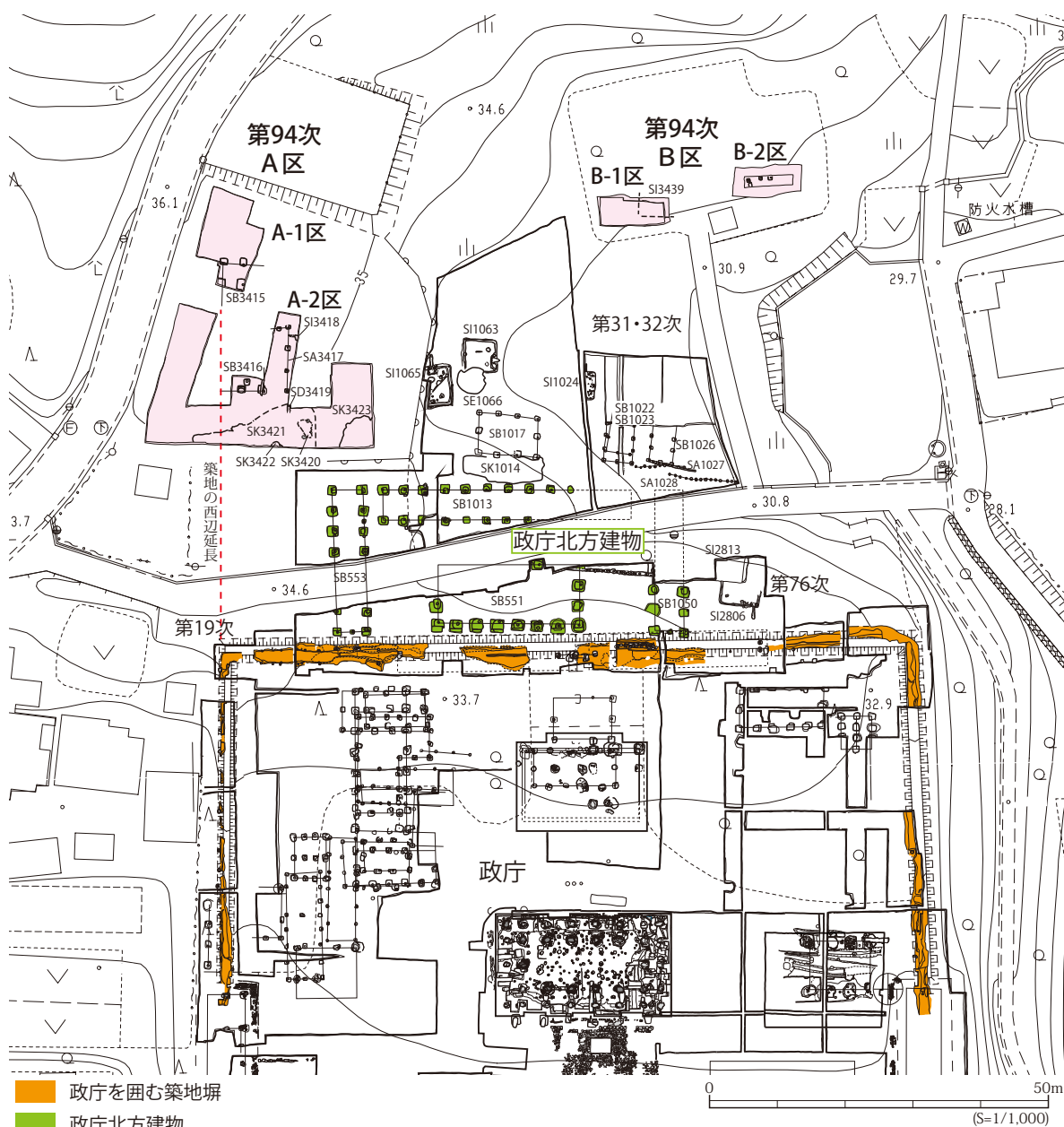
A区は政庁北側の東から西に入る深い沢に面した丘陵上にあり、現在の標高は34～36mで、北西から南東に下るわずかな傾斜が認められる。丘陵尾根部分に「E」字形の調査区を設定した。



写真2 第94次調査区遠景(南から)

A区は全体的に近現代の宅地造成等によって地山まで削平を受けており、遺構はすべて地山面で検出した。検出した遺構は掘立柱建物2棟、柱列1条、竪穴建物1棟、溝8条、自然流路1条、土坑10基、井戸1基である(第3図)。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、緑釉陶器、瓦、硯などがある。遺構のうち、形状・重複関係・出土遺物等から古代とみられるものは、掘立柱建物2棟、柱列1条、竪穴建物1棟、溝1条、土坑4基である(第2・3図)。そのほかは年代不明のものが多いが、重複関係から古代以降で、一部は近世以降の陶磁器を含む。

SB3415 掘立柱建物では4個の柱穴を検出し、南側と東側が調査区外に広がる建物とみられる。北側の柱穴2個は一辺 0.9 ~ 1.2mの隅丸方形で、直径約 24cm の柱痕跡を確認した。柱間は約 3.0mである。南東の柱穴は一辺約 1.6m、柱痕跡の直径が約 30cm と大型である。建物の西辺は政庁西辺築地塀の北側延長上にあり(第2図)、計画的な配置を示す可能性がある。



第2図 第94次調査区周辺の調査の状況

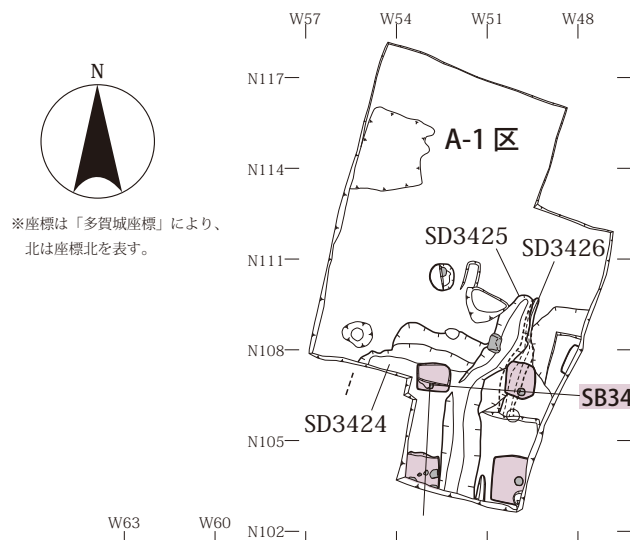
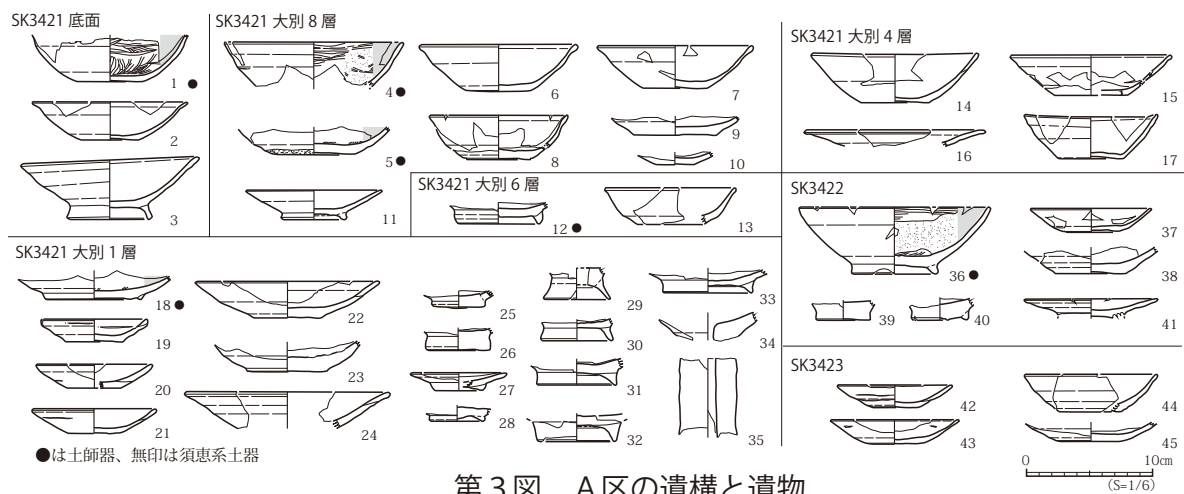
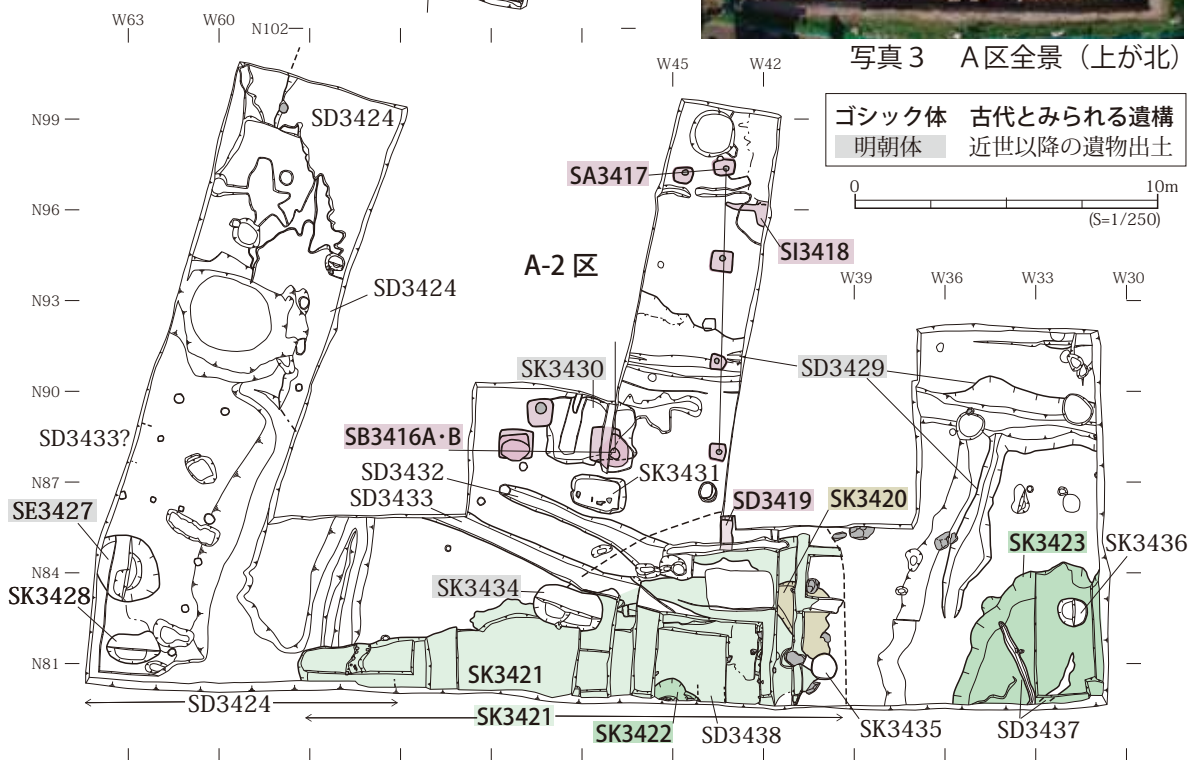


写真3 A区全景（上が北）



第3図 A区の遺構と遺物

SB3416 掘立柱建物では 2 個の柱穴を検出し、北側と西側が調査区外に広がる建物とみられる。建て替えが確認され、古段階・新段階ともに柱は抜き取られている。柱穴は隅丸方形または楕円形で、一辺または長径が 0.8 ～ 1.2m である。

SA3417 柱列では南北方向に 4 個、北端で西側に折れて 1 個の柱穴を検出した。柱穴は一辺 0.5 ～ 0.8m の隅丸方形、柱痕跡は直径 15 ～ 20cm の円形で、南北方向の柱間は 3.0 ～ 3.4m である。位置的に SB3416 に関連する柱列か、あるいは調査区外に広がる建物の可能性もある。

SI3418 竪穴建物は、南西隅部分と西辺に取り付くカマド煙道を検出した。

これらの建物・柱列については、出土遺物が少なく詳細な年代は不明だが、掘方が隅丸方形を呈することなどから古代と考えられる。SB3415 と 3416 は掘方・柱痕跡・柱間の規模が大きく、大型の建物の可能性がある。

SK3421 土坑は東西 18m、南北 6.4m にわたって検出した大型の土坑で、灰白色火山灰より新しい。サブトレンチを 4 ヶ所設定し、地山まで掘り下げたところ、堆積土・埋土は大別 9 層に分かれる。底面～大別 4 層出土土器は、口径 10.4 ～ 13.3cm、器高 2.9 ～ 3.9cm の須恵系土器が主体で、法量分化が不明確であることなどから、10 世紀中葉頃と考えられる（第 3 図 1 ～ 17）。一方、大別 1 層出土土器（18 ～ 35）は、須恵系土器に口径 9 cm 前後の小皿が一定量あり、環との間に明確な法量分化が認められることなどから、11 世紀後半頃と考えられる。SK3421 は 10 世紀中葉頃に機能し、11 世紀後半にかけて徐々に埋没したと考えられる。土坑の性格は不明だが、第 31 次調査でも政庁第 IV 期の大型の土坑 SK1014 が確認されている（第 2 図）。

SD3419 溝と SK3420 土坑は SK3421 より古い。SK3420 は全体が埋め戻され、その上を灰白色火山灰が覆っている。SK3422 土坑は、SK3421 の大別 4 層を掘り込み、大別 1 層に覆われる。重複関係と出土土器（第 3 図 36 ～ 41）の特徴から、11 世紀前半頃と考えられる。A 区南東隅の SK3423 土坑出土土器（42 ～ 45）も特徴が類似しており、近い年代と考えられる。

（2）B 区の調査

B 区は政庁から沢を隔てて北側の南斜面に位置する。現在の標高は 31 ～ 32m で、ほぼ平坦に造成されていたが、旧地形は北西から南東へ下る傾斜があったと推定される。東西方向のトレンチ 2 本（B-1・B-2 区）を設定して調査した結果、表土から地山の間に複数の堆積層と遺構面を確認した。検出した遺構は、竪穴建物 1 棟、柱穴 4 個、溝 2 条、小溝群 2 ヶ所、整地層 2 ヶ所である（第 4 図）。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、製塩土器、白磁、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、硯などである。

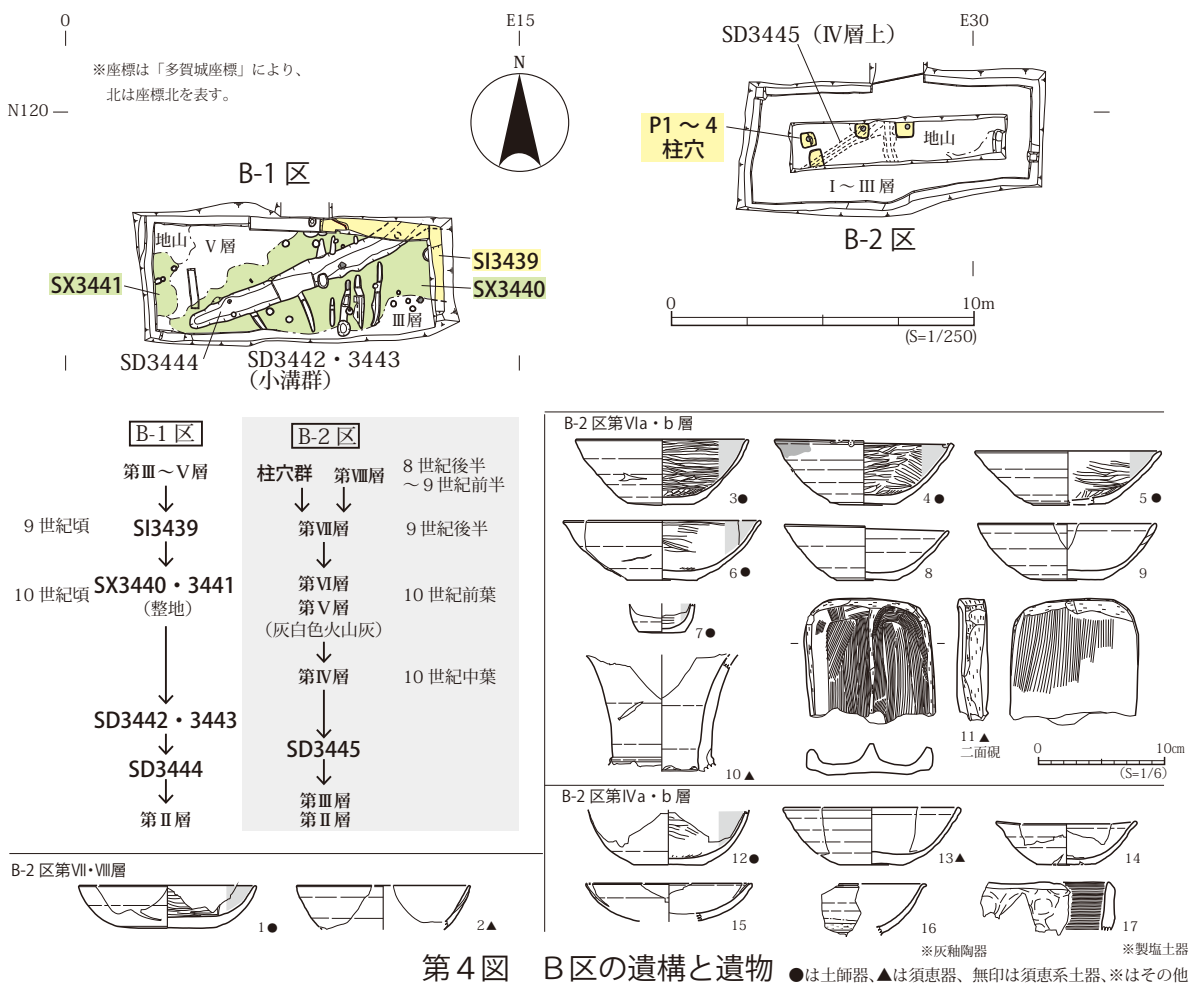
SI3439 竪穴建物は、B-1 区の北壁と東壁際に設定したサブトレンチで部分的に検出した。出土遺物や層序関係から 9 世紀代と推定される。SI3439 廃絶後の窪地を埋め戻す形で SX3440 整地層、その西側に SX3441 整地層が分布しており、SX3440 上面で SD3442・3443 小溝群と、それらより新しい SD3444 溝を検出した。SX3440 に須恵系土器が含まれることから、これらの遺構は 10 世紀以降と考えられる。

B-2 区では第 IV 層上面で SD3445 溝、第 IX 層地山上面で P1 ～ 4 柱穴を検出した。柱穴を覆う第 VII 層が出土遺物から 9 世紀後半頃と推定されるため、柱穴はそれ以前と考えられる。沢の南側

の第 31 次調査 SB1022・1023・1026（第 2 図）などと同様に、政庁第Ⅲ期頃に小規模な掘立柱建物が造営された可能性がある。また、第Ⅵ層以上に須恵系土器が含まれ（第 4 図）、第Ⅴ層が灰白色火山灰であることから、第Ⅵ層が 10 世紀前葉、第Ⅳ層が 10 世紀中葉で、SD3445 はそれ以降と考えられる。

（3）施釉陶磁器の出土

特筆すべき遺物として、A 区の SK3421 土坑や B 区の基本層から、施釉陶磁器が出土している（写真 5）。すべて破片だが、白磁 8 点、緑釉陶器 2 点、灰釉陶器 11 点があり、白磁のうち年代の分かるものは、11 世紀後半～12 世紀前半頃と推定される。



第 4 図 B 区の遺構と遺物



写真 4 B 区全景（上が北）



写真 5 第 94 次調査出土の施釉陶磁器